

『資本論』準備原稿についての覚え書き(二)

三 宅 義 夫

前稿の二への補記。前稿の注(8)の末尾で、一八五八年五月にマルクスがマンチェスターに潜在中、Grundrisseの原稿に——とくに「資本の章」のところについて——実際に手を入れたかどうかの件については、筆者はGrundrisseの手書き原稿は見えていないのであって、もし原稿にそうした形跡がはっきり認められるならば、マルクスの他のいくつかの手紙から見て納得がゆかないとしても、問題はかたんに消えてしまうことになる、と記しておいた。その後Grundrisseの手書き原稿のコピーを見てみたが、抹消、書き加えはいくつかの箇所で見られるが、しかしマンチェスター潜在中になされたものがあるかどうかは——実際に事に当たってみればとうぜんのことではあったが——識別できなかった。

前稿の四への補記。前稿の終わりの第四項「ノート第七冊六四ページのこと」のところで、つぎのように述べて

『資本論』準備原稿についての覚え書き(一)

おいた。Grundrisseを書いたのちにマルクスがつくった「七冊のノートへの索引」のなかで、「流通における鑄貨の摩滅」としてノート第七冊六四ページの箇所が指示されているのであるから、Grundrisseにはこの六四ページを含めなければまずい。現行のように七冊のノートに書いた一連の原稿をノート第七冊の六三ページまでとして、この六四ページの部分はずすことは、遺稿編集者として裁量をなしうる範囲をこえている事柄ではないか、と。

ところが、新MEGA第二部第三巻——これは一八六一〜六三年の二三冊のノートを収録している巻——の第一冊のApparatなかで、新MEGA編集者は右のノート第七冊についてつぎのように記している。——「Citatenheft⁽¹⁾のなかで以前の抜き書きを選別して記入することと並んで、マルクスはもちろん、新たな文献を研究したし、またすでに以前に利用した文献を新たな視点から抜き書きすることをした。この抜き書きをマルクスはノート第七冊のなかに書いた。このノート第七冊目は、そのはじめの部分の六三ページにGrundrisseの末尾が含まれている冊である。すぐつぎの、六三aと記されているページから、この抜き書き部分をはじめまっている (Auf der nächsten, mit 63a bezeichneten Seite, beginnt der Exzerptteil)。⁽¹⁾これは「この抜き書き部分は」、マルクス自身によつて『一八五九年二月二八日開始』という日付が記されている (Er ist von Marx selbst dahiert: „Begonnen 28. Februar 1859.“)。このノート第七冊は、通しページがつけられている計二七七ページの分量のものであつた (Das Heft VII umfasst insgesamt 277 durchlaufend paginierte Seiten)。(マルクスはこれをときおり『分厚い冊 (dickes Heft)』と呼んでいた。六三a—一九二ページは一八六一年の夏までに書かれ、つづきは一八六二年に原稿「二三冊のノートでの原稿」の仕事に書かれた。とくに地代の問題点との関連において、マルクスはここで多くの新しい文献を抜き書きした。ついで、この抜き書きの大部分が原稿で使用された。／＼したがって、ノート第七冊の抜き書き部分とCitatenheftないし一八

六一—一八六三年の原稿の諸部分とは、広い範囲にわたって同じ時期にでき上がったものである。場所の点では、ノート第七冊での抜き書きは主としてブリテイッシュ・ミュージアムで作成されたが、他方、Citatenheftと原稿とは大部分マルクスの書齋ででき上がった、⁽²⁾というちがいがあつた」(Apparat, Teil 1, S. 15~16. 「内一三宅」)。

(1) この Citatenheft は、一八五九年はじめに『経済学批判』第一冊を書き終えたのち、つぎの「第三章。資本一般」を書くための準備作業として、一八四〇年代、五〇年代につくつた数多くの抜き書き帳のなかからさらに書き抜いてつくつた抜き書き帳である。マルクスはこの抜き書き帳を『経済学批判』第一冊を書き終えたときからつくりはじめ、一八六一年夏にこれを終えた、とみられている。当初六ボーゲンのものであつたが、しだいにふくれて新たな用紙を追加してゆき、けっきょく二三ボーゲンの冊となり、マルクスはこれに一八九二の通しページをつけていた(二三ボーゲンで九二ページとすると、マルクスは一ボーゲンの紙を二つ折りにして四ページとして使つていたことになる。なお二三ボーゲンというと、Grundrisse が約五五ボーゲンであるから、これの四割ほどの分量といふことになる)。この Citatenheft をつくり終え、これをさらに整理したのち、マルクスは一八六一~六三年の二三冊のノートを書きはじめたのだった。この間の事情についてはのちにまた見ることとするが、ここでは Citatenheft という言葉が出てきたので、新MEGA第二部第三巻第一冊の Apparat での説明およびすくじの注(2)で挙げておく。H. Drohla その他執筆の論文に拠つて、とりあえず以上のことを注記しておく。

(2) この新MEGA第二部第三巻第一冊の Apparat でノート第七冊の Exzerptteil (抜き書き部分) について述べているのはほぼ同様なのが、*Wirtschaft u. Wissenschaft*, 24 Jahrgang, 1976, Nov. S. 1650~1651 に所載のつぎの論文でも記されてゐる。Hannelore Drohla, Bernd Fischer, Jürgen Jungnickel, Manfred Müller: Aus dem handschriftlichen Nachlaß von Karl Marx, Zur Erstveröffentlichung der Hefte I bis V des Manuskripts „Zur Kritik der politischen Ökonomie (1861—1863)“ in der Sprache des Originals. なるが、この論文の執筆者として名を列ねている右の四人は、Artur Schinckmann を Leiter とし、いずれもこの新MEGA第二部第三巻の編集に当たっている人々である。

ノート第七冊の六三ページ目には、既述のように、マルクスが「I 価値」という表題をつけて一ページたらず書いて途中でやめているページであるが、右に見られるように新MEGA編集者は、この冊の一六三ページの「すぐつ

ぎのページ」は「六三a」と記されているページであり、そしてこの「六三a」ページから「抜き書き部分」がはじまっており、この「抜き書き部分」は「一八五九年二月二八日開始」という日付が付されている、と説明している。

だが既述のように、ノート第七冊の六四ページは「七冊のノートへの索引」のなかで指示されているページであり、そしてこの「索引」は一八五八年の六月ははじめにつくられたものはずなのである。そしてまた、一八五九年一月に印刷用原稿を完成した『経済学批判』のなかでも、この六四ページの箇所は二箇所で使用されているのである。つまり、六四ページは、右の「一八五九年二月八日開始」と記されている「六三a」ページよりも九カ月ほど前に書かれているのである。まず、この間の事情はどう理解したらよいであろうか。

まず考えられることは、「六三a」というページはあとから挿入されたページではなからうか、ということである。手書き原稿のフォトコピーを見てみると、83というページはあとから挿入されたページであり、84という数字は用紙の左上の肩に記してある。このことは、六三ページの裏面が六四ページであることを語っているものと見てよいであろう。そうだとすると「六三a」ページは、つぎの六五ページに当たるページに「六三a」と記したのか、あるいは六四ページと六五ページとのあいだにあとから挿入したのか、いずれかということになる。そのいずれであるかは、「六三a」ページおよび六五ページのフォトコピーを見るとはつきりすることであるが、いまその機会がない。しかし「六三a」という形のページづけから推して、おそらくこの後者、つまり六四、六五のあいだにあとから挿入したページではないかと思われる。Grundrisseを書いた七冊のノートの他の冊ではこうしたあとから挿入の例はないが、一八六一と六三年の二三冊のノートのほうでは、こういう形のページづけをしてあとから挿入した例が挙げられている。^③

(3) 一八六一〜六三年の二三冊のノートは Grundrisse の七冊のノートとちがってページづけが通しページになっているのであるが、たとえば一二四 a—h ページについて、新MEGA 第二部第三巻の編集者はつぎのように述べている。「ノート第三冊のなかに一二四 a—h ページがあとから挿入された。一二五ページからすでに第三点の『相対的剰余価値』をはじめたのであるが、その後、ここでは「一二四 a—h ページでは」絶対的剰余価値への補遺が取り扱われている」。そして同編集者は、この一二四 a—h ページのなかで一八六一年一〇月三十一日に終わる半年間の工場監督官報告書——これの出版は一八六二年になってからである——からの引用があること、等々を挙げ、マルクスがこれを書いて挿入したのはノート第五冊を書いていたときだったであろうと推測している (Apparat, Teil 1, S. 12)。

右のようだとすると、「六三 a」ページはページづけの順からいえば六三ページの「すぐつぎのページ」であるとしても、実際には六三ページのつぎは六四ページであり、そのあとに「六三 a」ページがあとから挿入された、ということになる。しかし、つぎに、ではなんのためにマルクスはこの「六三 a」ページを挿入したのか、ということになると、——「六三 a」ページのフォトコピーを見るとなにか手掛りがえられるかもしれないが——いまのところどうも分からない。だが、さきに記した六四ページの件とかかわることであるので、行きがかり上すこし想像してみると、一応つぎのように想像される。

マルクスは『経済学批判』の原稿を一八五九年一月二五日にドゥンカーへ送ったのち、約一カ月後の二月二三日に「序言」の原稿を送っている（「僕は今日、ドゥンカーへ序言 (das Vorwort) を送った」——一八五九年二月三日付マルクスからラサールへの手紙。ただし「序言」の日付は「一八五九年一月」となっている。「六三 a」ページに記されているといふ「一八五九年二月二八日開始」の「二月二八日」は、この五日後に当たる。当時マルクスは『経済学批判』第二冊として「第三章。資本一般」を書く仕事にとりかかっていたが、その準備の一つとして、ここでノート第七冊に新た

に抜き書きを書きつけてゆこうとした。これ以下が想像である。——そのさい、すでにこの冊の六四ページには、あるいはおそらく六四ページ以下何ページかにわたって、抜き書きが記されていた。六四ページの抜き書きはすでに『経済学批判』第一冊のなかで使用済みのものであるが、それ以下のところでは今後の「資本の章」のために使うものがある。そこで、六四ページの抜き書きを含めて以下を今後 Exzerptheft (抜き書き帳) として取り扱い、使用することとしようとして、ここに新たに「六三a」という紙を入れ、「一八五九年二月二六日開始」と記した(したがって「六三a」ページはこの日付を記してあるだけであとは両面ともブランクか、またはすなくとも抜き書きは記されていないのではなかろうか)。こんなふうに想像することができる。そしてこんなふうに想像すると、六四ページとの関係が、また六五ページ以下との関係が、一応——すっきりとはないにしても——説明がつくことになる。右はまったくの想像にすぎないのであるが、「六三a」ページがなんのため挿入されたかについて行きがかり上考えておくことが必要となつたので、こんなふうに考えると一応辻褄が合うことになる、として記しておくしだいである。

以上、ノート第七冊の六三ページのあとのところできわめて不可解なことが生じていること——Grundrisse の編集者としてはこうした「六三a」ページが入っているため、六四ページを Grundrisse のなかに入れることを躊躇したのであろう——、そしてこの間の事情に一応の筋道をつけるにはこんなことが想像されるが、ということを書いて、前稿第四項にたいする補記としておく。

五 「価値」と題する断章の性質

さきに執筆時期について見たところで、ノート第七冊六三ページの「価値」の章はいつ書いたものだろうかという

ことを見た。ところで、マルクスはこの「価値」の章を書くことをノート一ページたらずでなせやめてしまったのであろうか、と考えてみると、既掲の一八五八年五月三十一日にマルクスが書いているエンゲルスへの手紙およびラサールへの手紙などからみて、この間の事情はつぎのようなことではなかったかと推測される。

すなわち、マンチェスターから帰って一週間ほどしてからだの調子がよくなったので、いよいよ「印刷のための仕上げ」をはじめようとして、まず手はじめに「I 価値」としてこの章を書きはじめた。しかしこれを書きはじめたが、第一分冊の「印刷のための仕上げ」をするにはまず七冊のノートへの索引をつくらなくては、仕事を進めるのに具合が悪いと考えた。そこで、これをやめて索引づくりに移った、ということではなからうか、と。

そして、もしそうだとすると、この「価値」の章は、ノート第一冊から書いてきた *Grundrisse* のつづきの部分として書いたものではなく、というか、より正確に言えば前のほうの部分と同じ性質のものとして書いたものではなく、「印刷のための仕上げ」の手はじめとして書きかけたものであった、ということになる。この原稿の性質をそう考えざるをえないことになる。

だが、新MEGA編集者は、ノート第七冊のこの六三ページで「I 価値」という表題を記した時点で、マルクスはノート第一冊のはじめの「貨幣の章」の表題のところにⅡという数字を入れたのであろうと推定している。「おそらくこの時点ではじめて、マルクスはノート第一冊の『貨幣の章』の前に『Ⅱ』という数字をつけたのであろう」(第二部第一巻第一冊 *Apparat Teil 1, S. 28*)、「たぶん半年後にはじめてⅡという数字がつけ加えられたのであろう」(同下、*Text, Teil 1, S. 15**)。もし新MEGA編集者のこの推測が当たっているとすると、この「I 価値」はⅡ、Ⅲとむしろ一体のものとして見なければならぬ(Ⅱ「資本の章」のところにはⅢという数字はついていないのであるが)、つ

まりマルクスは前のほうの部分と合わせて一体をなすものとして書こうとしたものだ、そう見なければならぬ、というふうになつてくる。

この新MEGA編集者の推測は私にはどうも納得がゆかないのであるが、そのことについてはあとで項を改めて述べることにする。ここでは、この「価値」の章の書き出しの最初のところでマルクスが Dieser Abschnitt nachzunehmen. と書いてあることについて見ておくことにする。というのは、この文がどういう意味のものであるか自体が一つの問題であるとともに、右でこの章は「印刷のための仕上げ」の手はじめとして書きかけたものであろうとしたが、それにはこの一文をどう考えるかについて記しておかないことには具合が悪いからである。

この Dieser Abschnitt nachzunehmen. とどう書き出しの一文の意味は、私にはどうも判然としなかった。そしてそのことが、この章を「印刷のための仕上げ」の手はじめとして書きかけたものであろうと推測するに当たって、ひっかかりとなつていた。そこで、今年(一九七七年)五月にちょうど東ドイツに行くことになつた僚友の川鍋正敏教授に、東ドイツのML研究所を訪ねたさい、同研究所ではこの一文をどう解釈しているかということ、その他二、三の件について聞いてみることを依頼した。川鍋教授が同研究所のマルクス・エンゲルス部門の副部長 Roland Nietzold 氏に会い尋ねられたところ、この nachnehmen という語は一九世紀半ばごろまで使われ、通じていた言葉であつて、ここは同研究所でも集まって討議した箇所であるが、Ich will dieses Gebiet noch arbeiten. という意味だと解釈している、ということであつたさうである(なお新MEGA第二部のTextの冊の扉裏に第二部編集委員会の構成メンバー四人の名が記されているが、Nietzold 氏の名もそのなかにある)。辞書で見ると、nachnehmen は一つには nachholen と同じ意味だとしているが、東ドイツのML研でこの冒頭の文を、言いかえれば右のような意味だと解しているとす

ると、この *nachnehmen* は *nachholen* —— あとから補充する、あとで埋める —— とほぼ同じだと解していることになる。したがってこの一文は「この篇はあとで補充しなければならない」と訳し、解釈しておくこととしよう。⁽⁴⁾

(4) *nachnehmen* とどう語をブルクスは他の箇所でも、このように用いている。Übrigens ist es mir lieb, wenn Du möglicherweise den „Gurdian“ mir täglich schickst. Es verdoppelt die Arbeit und bringt Störung herein, wenn ich auf einmal eine ganze Woche oder so *nachnehmen* muß [文中のイタリック体は原文のもの。アンダーライン―三宅] (11) でも *nachnehmen* を *nachholen* と同じ意味に使っているとする。つぎのような訳になる。——それはそうと、できれば『ガーディアン』を毎日送ってもらえると、ありがたい。一度に丸一週間分ぐらいをあとから埋めねばならないとなると、仕事が増えるし、混乱が入りこむのだ。

これは一八五七年二月一日付エンゲルスへの手紙の一節であって、既掲の「僕はまったくものすごく仕事をしている。……第一、経済学概要の仕上げ。……第二、現在の恐慌。これについては——『トリビュン』への論説を別とすれば——ただ帳付けしているだけだが、しかしこれがなかなか時間をとる」とし、そのあと、この「現在の恐慌」について春ごろエンゲルスと一緒に「パンフレット」をつくってみたらどうかと考えている、と記していた箇所につづく文である。ここで「帳付け」と言っているのは既述の「恐慌ノート」をつくっていたことを指しているものであるが、右の文は、このノートに記入したり、切り抜きを貼るうえで、『マンチェスター・ガーディアン』がまとめて送られてくるとこれによって前の日付のほうをあとから埋めなければならぬので、手数がかかるし、混乱が生じる、だからできるだけ毎日送るようにしてくれるとありがたい、と述べているわけである。この場合には *nachnehmen* が *nachholen* と同じ意味で用いられていると解して、文意がはつきりと通る。

ちなみに、手紙のこの邦訳は、大月書店刊の『全集』第二九卷一八七ページの訳では、「一度に一週間分をかそいら受け取ることになる、仕事は倍になるし、邪魔が入ったりもする」と訳されている。また「国民文庫」の『マルクス・エンゲルス資本論書簡』(1)では、「一度にまる一週間分などをあとから受け取らなければならない」となると、骨折りが倍になり、じゃまがはいってくるわけだ」と訳されている(二二四ページ)。傍点はいずれも三宅の付したもの(なお、「邪魔が入る」というところにも傍点を付したのは、一週間分ほどまとめて「あとから受け取る」と解した場合でも、「邪魔が入る」ではなんの

ことかわからなく、無理であろう、という意味である)。また大月書店刊の Grundrisse の訳書『経済学批判要綱』では、さきの第七冊の三ページ冒頭の箇所は、「この篇はあとから用いるためのもの」と訳されている(第四分冊、八五三ページ)。

また、nachholen という語は、マルクスは Grundrisse のなかで、たとえば「貨幣の章」の終わりのところで、Es ist in besonderen Abschnitten nachzuholen : (以下)が特別の諸篇であとから補充されねばならぬ」として、(1)から(9)の問題点を挙げておられる(『ブルンナーリッペ』、S. 147、新MEGA第二部第一巻 Text, Teil 1, S. 159、なお新MEGAでは右の文は Es ist nun in besonderen Abschnitten nachzuholen : と解説されている)。またこのたび前後でも「箇所」で nachzuholen と記している。

The Pelican Marx Library の Martin Nicolaus 訳の *Karl Marx / Grundrisse*, 1973, P. 881 以下、46 Dieser Abschnitt nachzunehmen. の句を *to be brought forward*. This section to be brought forward. のように「この篇は前のほうに持っていくべきである」と解釈している。この英訳についても川鍋教授にML研の意見を聞いてみることを依頼したが、Nietzold 氏は「この英訳されていることは知っているがどう解するのはまちがいだ、どう見解であったのかとである」。

付言しておくべきは、この英訳書では、右に挙げた「貨幣の章」の終わりの『ブルンナーリッペ』S. 147 の nachzuholen と記している箇所は、In separate sections, to be brought forward. と訳されている (P. 237)。またそのすぐ前で使われている Nachzuholen : *to be brought forward* : *to be taken up* (Dies nachzuholen.) のように (This to be brought forward) と *to be taken up* に *to be brought forward* と訳している (P. 235, 237)。このマルクスが nachzuholen と記しているのは、明らかに、あとからの点について書いて埋めなくてはならぬ、という意味であって、to be brought forward と解するのは無理である。このように、nachnehmen とは、なく nachholen のことであるが、ただしかし、Nicolaus 氏も nachzunehmen を nachzuholen と同じ意味だと解して、たが、東ドイツのML研究所の見解と同じであった、ということは右の英訳から知ることができよう。

さて、「I 価値」という表題をつけて述べはじめたその最初のところで「この篇はあとで補充しなければならぬ」と書いたとすると、これはいったいどういうつもりで書いたのであろうか。この「I 価値」は、六三ページのはじめに表題を記し、そして同ページを最後まで書かず途切れている一文であるが、その末尾に「この篇はあとで

補充しなければならない」と記しているのであれば自然であるが、書きはじめのところでこう記しているのは、仕事の運びとして自然とは考えがたい。ドイツ文であるので東ドイツのML研究所の解釈が正しいのであろうが、そしてほかにより適当な解釈が考えられるわけではないが、しかしそれにしてもこの一文はどうも納得のゆかない点が残る。だがともかくこういう意味だとして、マルクスはいったいどういふつもりでこう書いたのだろうか。

前記のようにこの章は当時のマルクスの手紙からみて、「印刷のための仕上げ」をはじめようとし、その手はじめに書きはじめ、しかし第一分冊の「印刷のための仕上げ」をするにはまず七冊のノートについての「索引」をつくらねばと考えて、これを書きかけですぐにやめてしまった、のではないかと推測されるのであるが、そのこととこの章のはじめで「この篇はあとで補充しなければならない」と書いていることは、どう結びつきうるだろうか。ということ、これはつぎのように考えるほかない。すなわち、マルクスはマンチェスターから帰ってきて「印刷のための仕上げ」にいよいよとりかかろうとしたが、そこで実際に印刷用原稿を直接書くつもりではなく、まず印刷用原稿の準備原稿を書いてみようとした。そして、まだそういう表題のもとでは書いていない最初の「価値」の章に手をつけることからはじめたが、そのさい、これは印刷用原稿のためのまったくの準備原稿であるので、あとのほうを書いていったのち、たとえば「貨幣」の章まで一応書いていったのち、ふたたびこの「価値」の章を「補充」しよう、マルクスはこんなふう考えて「この篇はあとで補充しなければならない」と書いたのではなかったらうか。と考えられるのである。

この、「印刷のための仕上げ」にとりかかるといってもすぐに印刷用原稿を書くつもりではなく、まずそのための準備稿を書いてみようとしたということは、六月はじめに「索引」をつくってから書いた原稿も印刷用原稿ではなく

『グルントリッセ』編集者が Utext (原文文) と呼んでいるノートであったことから見られることであって、その点からいっても右の推測はあながち無理な推測ではないといえよう。また、さきに二の執筆時期について見たところで、『グルントリッセ』編集者がその「序言」のなかでつぎのように記していることを掲げておいた。——「ようやく五月三一日にマルクスは『仕事ができるようになった』と感じ、『さっそく印刷のための仕上げ』をはじめた。／＼まず第一に彼は六月はじめに、ちょうど終わった粗稿の本文に目を通し、ノートMの末尾のところにノート第一—第七冊のなかで最初の二章に關係のあるものをすべて書きとめた。……だがマルクスは一八五八年の夏には、『索引』と価値の章の冒頭との執筆までしか進まなかった」(S. XI~XIII)。さきの二ところでは、『グルントリッセ』編集者がここで五月三一日以後の「印刷のための仕上げ」としてまず「索引」づくりをし、また「価値の章」を書いたとしているのはおかしい、「価値の章」を書いたのは五月三一日以前であろう、ということを書いておいたが、『グルントリッセ』編集者が「価値の章」を「印刷のための仕上げ」の仕事として見ている点にかんしては、右の私の見方と同じであったことになる(そしてこの点『グルントリッセ』編集者の見方は、「I 価値」を「II 貨幣の章」のほうとむしろ一体のものとする前記の新MEGA編集者の見方——これはロシア語版序文にも見られないものであって新MEGAで新たに見られる新見解である——とはちがっていることになる)。

「価値」の章の性質については以上のように考えられるということを記し、終わりにつぎのことを付記しておく。

現存している Utext ではこの「価値」の部分はノートが失われているので、この「I 価値」で書かれている文と対照することができないが、『経済学批判』の「商品」の章と対照してみると、「I 価値」で書いている事柄のほ

とんとすべてが『批判』のなかでも取り扱われており、ほぼ同じ形の言い方で述べているものもいくつか見られる。そしてノート第七冊六三ページの手書き原稿を見ると、文字の上に横線を引いて消している行——この原稿を書いているさいに書き直しのために消したというのではなく——がいくつか見られるとともに、ページ全体について中央に斜の線が上から下まで引かれている。Erlidigungsvermerk (済みじるし) である (この済みじるしについては、前稿で「七冊のノートへの索引」中の durchgestrichen について記しておいた箇所——本誌第三一巻第一号一二三ページの終わりの箇所——、およびつぎの第六項で掲げておく新MEGA編集者の記述中のこれについての説明を見られたい)。なお、この「I 価値」の部分については「七冊のノートへの索引」のなかでは、最初の「価値」の部分のなかでまったく挙げられていない。

六 「貨幣の章」に Erlidigungsvermerk がなくについて

——新MEGA編集者の説明にたいする考証上の疑問の一——

新MEGA編集者は、ノート第一冊と第二冊はじめに書かれている「貨幣の章」についてつぎのように記している。「一八五七—五八年の原稿は、印刷のためとすることを予定したものではなかった。一八五八年一月二九日付エンゲルスへの手紙のなかで、マルクス自身この原稿を『粗稿(Rohentwurf)』、今後の仕上げないし手入れの基礎(Grundlage für weitere Ausarbeitungen bzw. Überarbeitung) だと呼んでいる。そこでマルクスは、一八五九年に公刊した『経済学批判』第一冊の執筆にさして『貨幣の章』の原稿を基礎においた。……もちろん、本文の手入れはきわめて大幅になされたのであつて (Die Überarbeitung des Textes war allerdings so bedeutsam,——) 」

『資本論』準備原稿についての覚え書き (一)

bedeutung 前後の意味あいからみて bedeutend といったほどの意味で使われているのではないかと見受けられるので、一応そういうふうにしておく)。一八五七年一〇月—十一月に書かれた『貨幣の章』からはやや長い句で直接にのちの原稿のなかに取り入れられたものは一つとしてなかったほどであった(……, daß aus dem im Oktober / November 1857 verfaßten, Kapitel vom Geld “ nicht eine einzige größere Passage direkt in die spätere Fassung übernommen wurde)。したがって、(folglich) の章では済みごせし (Erlidigungsvermerke) すなわち垂直または斜めの線での本文抹消—マルクスは自分が利用した原稿の箇所にとのしるしをつけていた—もまたまったく見出されない。これに反して、(dagegen)、『資本の章』では済みじるしがかかなり数多くつけられている。……これらの箇所の大多数は一八六一—一八六三年の原稿のなかで使用された。……一八五七—一八五八年の原稿と一八六一—一八六三年の原稿とを比較してみると、一八五七—一八五八年の原稿のなかで済みじるしがついている本文箇所以外でも、その他の多数の本文箇所がそのままの言葉で、またはほとんどそのままの言葉で、一八五七—一八五八年の原稿から一八六一—一八六三年の原稿のなかに取り入れられたことがわかる。このことは、マルクスが一八六一—一八六三年の原稿の仕事をしていただきたい、一八五七—一八五八年の彼の原稿をしばしば手元に持ってきていた (öfters heranzog) ことを示している (Apparat, Teil 1, S. 30~1. 傍点—三宅)。

じっさい、右で新MEGA編集者が記しているように、ノート第一冊と第二冊はじめに書かれている「貨幣の章」のところでは、手書き原稿のコピーを見ても Erlidigungsvermerk がつけられていない。だが右のように、その理由はこの「貨幣の章」からは「やや長い句で直接にのちの原稿のなかに取り入れられたものは一つとしてなかった」ためだ、その結果として Erlidigungsvermerk がついていないのだと見ることは、どうも納得ができない。し

かもこの新MEGA編集者は、「貨幣の章」がこうであるのにたいし、「これに反して」として「資本の章」での状況を述べ、このことは「資本の章」の場合にはのちの原稿の仕事をしていきたい、これを「しばしば手元に持っていていたことを示している」と述べている。つまり、「貨幣の章」の場合にはそうでなかったと見ているわけである。そうであるとする、この新MEGA編集者の見解はますます納得がゆかないことになる。

既述のように、マルクスは七冊のノートのGrundrisseを書いたのち、一八五八年六月はじめに「七冊のノートへの索引」をつくった。この「索引」は「第一案」と「第二案」とがつくられており、「第一案」は「(I) 価値」、「(II) 貨幣」、「(III) 資本一般」から成っているが、この「(III)」のところはほとんど書かれていない。他方「第二案」はもっぱら「貨幣」について記されているものであって、これはかなりくわしい(『グルントリッセ』S. 860-7)。そしてさきの四のところでも記しておいたように、この「索引」のなかでマルクスが線を引いて文字を消している箇所について『グルントリッセ』編集者は durchgestrichen という脚注をつけているが、こうした脚注のついている箇所は「第一案」のなかには一箇所しかなく、他はもっぱら「第二案」のところにつけられている(この「第一案」中の一箇所は『グルントリッセ』S. 857 の二五〜三〇行の箇所であって、ここに『グルントリッセ』編集者は「すべてが一つつつ線を書いて消されている (alles einzeln durchgestrichen)」という脚注を入れている。マルクスがここを線を引いて消したのはのちの原稿を書くとき使ったためではなく、「第二案」のS. 866 の九〜三〇行の箇所と同じことをよりくわしくつるさいに二つつつ消したものと見受られる)。そして「第二案」のほとんど大部分の箇所に durchgestrichen という脚注がつけられている。またじつさいに手書きのもののコピーを見ても、「第二案」の「索引」はほとんど全部の箇所が水平の線や波形の線を引いて消されている。このように「七冊のノートへの索引」の「第二案」は「貨幣」についてのものであり

(これは(1)尺度としての貨幣、(2)交換手段としての貨幣、(3)貨幣としての貨幣、の三つに区分けされている)、そしてこの各箇所はほとんどすべて、のちの原稿を書くときに使ったという印の線を引いて消されているのであるが、そこで指示されているノートのページはどこかという点、ノート第一冊、ノート第二冊のはじめ、およびノート第七冊がほとんどすべてであって——既述のように(前稿の本誌第三二巻第一号九三〜四ページ)ノート第七冊のなかでは途中で「貨幣の章」に属する事柄が記されている——、七冊のノートのうちそれ以外のノートのページが指示されているのは二、三箇所すぎないのである(このほか、別の抜き書き帳を指示している箇所が数箇所ある)。

「索引」が右のようであることと、ノート第一冊〜第二冊はじめの「貨幣の章」のところに *Erläuterungsvermerk* がついていないことを合わせてみると、まず、事情はつぎのようなことではなかったか、と考えられるであろう。すなわち、「貨幣の章」のところに *Erläuterungsvermerk* が「まったく見出されない」のは、マルクスが *Grundrisse* の「のちの原稿」にこれを利用したさいに、ノートの本文に済みじるしをつけず「索引」の当該箇所線に引いて消しておく方法を採用したためではなからうか、と。そして、もしそうだとすると、さきの新MEGA編集者の判断はまったくの見当はずれの判断だったということになるわけである。

だが結論を出すことを急かずに、そのまゝにたしかめておく必要があるいくつかの点について見ておくこととしよう。

1 一つは、「貨幣の章」では済みじるしが「まったく見出されない」のに反して「資本の章」ではなぜ済みじるしが「かなり数多くつけられている」のか、という点について。これは、一方の章では済みじるしがぜんぜんないのに他方の章では済みじるしがついているのはなぜか、という形に問題を立て直してみると事態がはっきりする。

マルクスは、『経済学批判』第一冊を書いたのちまもなくの一八五九年二月ごろ、つぎの「第三章」を書く準備として、一八五七―五八年に書いたノートM、七冊のノート、Textを書いたノート、などこれらのノートのうち「第三章」に利用しようとする箇所について、Referate zu meinen eignen Heften (私自身のノートへの心覚え)と記した索引をつくった(『グルントリッセ』S.951～967所収)。このReferateは各ノート別につくったものであったが、マルクスはこのReferateをつくったのち——おそらく同年二月―三月ごろ、とみられているが——、こんどはこの「第三章」で書くことを予定していた項目順に、利用するノートのページを記した索引をつくった、——『グルントリッセ』S.969～980に編集者が「Planentwurf von 1859 (一八五九年の計画草案)」と名付けて収録しているもの。これらは『経済学批判』第一冊についての「七冊のノートへの索引」と同じ性質のものであって、第二冊用としてつくったものであった。

だが「七冊のノートへの索引」とこのReferateおよび「Planentwurf」とをくらべてみて気付く大きな差異は——といつてもいまここで問題としている事柄にとつてのことであるが——、前者には『グルントリッセ』編集者が durchgestrichen という脚注を「数多く」つけているが、後者にはそうした脚注が「まったく見出されない」ことである。じつさい後者の手書き原稿のコピーを見ても、この原稿を書いていたさいに書き損じの意味で消したと見られる箇所は二、三あるが(項目を書き消し、そのにはまだノートのページは記してない)、Erlidigungsvermerkは「まったく見出されない」。

つまり、ノート第二冊と第二冊はじめの「貨幣の章」では、ノート本文のところにErlidigungsvermerkが「まったく見出されない」のたいし、「索引」の「第二案」のほとんどすべての箇所にこの済みじるしがつけられていた

のであるが、ノート第二冊八ページ以降の「資本の章」ではノート本文のところに Eridigungsvermerk が「数多く」つけられているのになし、「貨幣の章」での「索引」に該当する Referate なし [Planentwurf] のほうには済みじるしが「まったく見出されない」のである。このことは、「資本の章」をマルクスがのちの原稿——一八六一〜六三年の二三冊のノート——に使ったさいと、「貨幣の章」を『経済学批判』第一冊に使ったさいとは、索引とノート本文とに済みじるしをつけるつけ方がちがっていたことを示しているものであり、そして「資本の章」のノート本文になぜ済みじるしがついているのか、その理由を語っているものと見ることができであろう。

こうして見てくると、本項のはじめに挙げた新MEGA編集者の説明は、「貨幣の章」についても「資本の章」についても、それに対応する「索引」、および Referate なし Entwurf との関係を検討しなかったのではなからうか、という疑いが生じる。この関係を考慮したのであれば、前掲のような判断をするはずがないし、またかりに前掲のような判断をするとしてもそのさいには、この関係はこうなっているがそれにもかかわらず自分たちはこう判断するのだ、といった断わり書きをすることがどうしても必要だと考えたはずだからである。新MEGAの編集はかなり周到な準備のもとに行なわれているはずなのであって、そこからいうと、すでに『グレントリッセ』でも収録しているこれらの「索引」や Referate や Planentwurf を新MEGAでの Grundrisse 編集者が考慮に入れなかったことはふしぎであるが、そうでも考えないと筋が通らないことになるのである。

2 前述のようにノート第七冊でも途中で「貨幣の章」に属する事柄が扱われており、「索引」のなかでもこのノート第七冊の箇所が数多く挙示されている。そこでつぎに、ノート第一冊と第二冊はじめの「貨幣の章」では本文に済みじるしをつけていないが、このノート第七冊のほうでは、「索引」で済みじるしがついているさい、そこで指示

しているノート本文のほうに済みじるしがついているか、いないか、この点を見ておくこととしよう。

ノート第七冊の部分は新MEGAでは第二部第一巻第二冊で収録することになっており、これの刊行はいまのところ来々年の一九七九年と予定されている。第一冊の Apparat でノート第二～第四冊についてどこに済みじるしがついているかを一覽表で記しているが (Verzeichnis der Erledigungsvermerke, Apparat, Teil 1, S. 98) 右の第二冊が刊行されると、同様にノート第四～第七冊のどこに済みじるしがついているかが一覽表でわかることになるはずである。だがそれが利用できないので、ここでは手書き原稿のコピーで二、三の箇所を見てみよう。

貨幣についてつくられている「索引」の「第二案」では、既述のように『グルントリッセ』編集者は durchgestrichen という脚注をほとんど大部分の箇所につけており、またこのマルクスの手書き原稿のコピーを見てもほとんど全部の箇所が線を引いて消されているが、そのうちたとえば最初のノートM二九ページのところを見てみよう。ここは「尺度としての貨幣」についての部分であるが、その『グルントリッセ』でいうとS.861の二一～二三行の箇所でマルクスはつぎのように書いている。Ideal Standard of money. (Steuart. VII, 26, 27). (VII, 38). Urquhart. (VII, 55). 『グルントリッセ』編集者(たけ)の S. 861 の二一～二三行(たけ) mit zwei Querlinien durchgestrichen (二本のはすかいの線で消されている) という脚注を付している。手書き原稿のコピーで見ると、コピーが鮮明でないせいかこの二一～二三行の箇所は一本の斜線で消されているとしか見えないのであるが、線が二本であるか一本であるかということはこの場合どうもよくわからず、ともかくこうした Erledigungsvermerk がつけられている。そこでいま、右のなかの最後の Urquhart. (VII, 55). と記している箇所を取り上げてみよう。

『グルントリッセ』編集者はこの部分に「S. 747-14」という『グルントリッセ』中のページおよび行を記してい

る。ノート第七冊五五ページのなかで Urquhart に引いて記しているのは『ブルントリッセ』の二〇と S. 747 の七と一四行であり、その下には Der Urquhartsche Blödsinn über den standard of money (貨幣の本位についてのマークートのたわじ)と記して D. Urquhart の著書 *Familiar Words*, London 1855 からの抜き書きが掲げられている。したがってマルクスが「索引」の右の箇所を Urquhart. (VII, 55). と記していたとき、それは、『ブルントリッセ』編集者がそこに「S. 747ⁿ⁻¹⁴」と記入しているように、マルクスとしてノートのこの箇所を指示していたものであることはたしかであるといえよう(なお、「索引」の「第一案」の「尺度としての貨幣」のなかでもその終わりのほうのところに Urquhart. VII, 55. と記してある箇所があり、その下に『ブルントリッセ』編集者は「S. 747ⁿ⁻¹⁴」と記入しているが、同じく右と同様に「S. 747ⁿ⁻¹⁴」と記しておくべきであろう)。

さて、そこでノート第七冊の五五ページを手書き原稿のコピーで見ると、右の『ブルントリッセ』での S. 747 七と一四行の箇所に V 字形の線が引いてあるのがかすかに見え、またその他の二、三箇所にも似た形の線が引いてあるとともに、五五ページ全体にわたって上から下までほぼ垂直の線が引かれている。つまり、Urquhart として「索引」のところに *Erläuterungsvermerk* がつけられている箇所の、ノート本文のところに *Erläuterungsvermerk* がつけられている。

やや煩わしい調べであるが、いま一箇所、「索引」の「第二案」中のこんどは「交換手段としての貨幣」の部分について見てみよう。この部分はノート M の三一～三二ページであるが、たとえばその三一ページ、『ブルントリッセ』の S. 863 の一七行目のところに、マルクスは Corbet (VII, 52). と書いている。『ブルントリッセ』編集者はこの一六～一七行に引いて durchgestrichen ともう脚注をつけている(手書き原稿のコピーで見ても文字の上に横線

を引いて消してある。ノート第七冊の五二ページのなかでは、『グレントリッセ』でこうと S. 737 の四〇行目から S. 738 の七行目にかけて、Unterschied zwischen buying (G—W) und selling (W—G) (購買 (G—W) と販売 (W—G) の区別) として Th. Corbet の著書 *An Inquiry into the Causes and Modes of the Wealth of Individuals*, London 1841 からの抜き書きが掲げられている。そして『グレントリッセ』編集者が「索引」G や G の Corbet (VII, 52). G と同じに「S. 737a—738」を記入している。

そこでノート第七冊五二ページの右の箇所は手書き原稿でどうなっているかを見てみると、五二ページは最初の行——『グレントリッセ』での S. 737 の二行目——から、『グレントリッセ』での S. 738 の四四行目までが、一本は斜めに途中まで右に傾けて、途中からこんどは左に傾けて線が引かれており、それと交叉する形でいま一本上から垂直の線が引かれている(またそのあとノートで七行おいて、つぎの『グレントリッセ』でこうと S. 739 の一九行目からはじまる文が二本の線で消されている)。つまり、ノート本文のほうで、こゝでも Erledigungsvermerk がつけられている。

また、さきに前稿の四で「索引」の「第二案」中に Abnutzung der Münze in der Zirkulation. VII, 64, VII, 61. と記してある箇所について見たさい、「索引」のここに『グレントリッセ』編集者が durchgestrichen という脚注を付していることを述べておいた(本誌第三一巻第一号一二三—四ページおよび一二六—七ページ)。「索引」で指示しているこの箇所のノート第七冊の手書き原稿を見ると、六一ページの箇所は——やや不分明であるが全ページにわたって——垂直の二本の線で、また六四ページの箇所はすべてドッドの書からの抜き書きであるがその全文が一本の線とともに消されている。

このように、ノート第七冊のほうは、さきのノート第一冊と第二冊はじめの「貨幣の章」の場合とちがって、「索

引」で済みじるしがついているさい、そこで指示しているノート本文のところにも済みじるしがついている。

ただここでちょっと問題があるのは、以上見たように、「索引」の Uryhart. (VII, 55). に対応するノート第七冊五五ページの本文箇所(『グルントリッセ』での S. 577-578 一四行)ではそこに V 字形の線が引かれているが、またそれとともに五五ページ全体にわたって垂直の線が引かれていること、また「索引」の Corbet (VII, 52). に対応するノート第七冊五二ページの本文箇所(『グルントリッセ』での S. 737 四行目~S. 738 七行目)ではこの箇所だけを消している線はなく、ページの最初からこの箇所の一〇数行下の行までが二本の線で消されていること、また「索引」の Abnutzung der Münze in der Zirkulation. VII, 64, VII, 61. に対応するノート第七冊の本文では、六四ページが全文にわたって消されているのはよいとしても、六一ページの箇所がその箇所だけでなく全ページにわたる線で消されていること、である。つまり、ノート本文での済みじるしのつけ方がかならずしも当該箇所を使ったさいにつけたようなつけ方になっていなく、上下もっと広い範囲で引いている線で当該箇所が消されている形になっている場合がある、むしろそのほうが多いことである(なお、このことは、このあとで見るノート第七冊二七ページ、三八ページ、および五五ページの箇所でもほぼ同じである)。

ノート第一冊と第二冊はじめの「貨幣の章」ではノート本文に済みじるしをつけていないのにたいし、ノート第七冊のほうでは済みじるしがついている理由としては、一つにはつぎのことが考えられる。このノート第七冊の六二ページまでは一応表題は「資本の章」なのであって、既述のようにその一五ページ以下のところは「資本の章」の終わりの部分、「第三篇」を書くはずの場所であった。しかしそのなかでマルクスは「貨幣の章」に属する事柄をかなり取り扱った。したがって貨幣についての「索引」でもこのなかの箇所がかなり多く指示されているのであるが、その

指示している箇所を「のちの原稿」である『経済学批判』第一冊で使ったさい、その箇所が本来「資本の章」のノート部分であるため、マルクスは、そこはもう貨幣の章を書くさいに使ったというしるしをつけておいたほうがよいと考えて済みじるしをつけておいた。まず一つには、このように考えられる。だが済みじるしをつけ方がかならずしもその箇所についてとくにつけているのでない右のようなつけ方をしていることから見ると、あるいは「資本の章」をマルクスがのちの原稿（一八六一―六三年の二三冊のノート）に使ったさい、すでに『経済学批判』第一冊で「貨幣」について書いているのでこれらの箇所は用済みなのだと一緒に消した、というのであったかもしれないとも考えられる。このへん事情ははっきりわからない。

しかしともかく、同じく貨幣についての「索引」で指示し、そして「索引」のほうで済みじるしをつけているのに、それに対応する本文箇所のほうが、一方のノート第一冊と第二冊はじめでは済みじるしをつけていないのたいし、他方のノート第七冊では済みじるしで消されている、ということはこのでわかったことになる。

3 同じく「索引」でノートの箇所を指示し、そして「索引」のその部分に済みじるしをつけている場合においても、ノート第七冊のほうでは済みじるしがついている。くり返していうと、2で見たことはこういうことであった。そこで以上見てきたことで、もはや、本項最初に掲げておいた新MEGAでの説明が誤りであることは検証済みとしてよいと考えられるのであるが、念のため最後に、マルクスはノート第一冊と第二冊はじめを使った場合と、ノート第七冊を使った場合とでは、その使い方がちがったかどうか、という点を調べておこう。というのは、前者のノート本文には済みじるしがなく、後者のノート本文が済みじるしで消されているのが、もしノート本文の使い方の差異から来ているのだとすると、2で見たノート第七冊では済みじるしがついているということが、こんどは逆に新MEG

Aでの説明が誤りでないことを示すことになり、はじめに述べた、ノート第一冊と第二冊はじめに済みじるしがないのは「索引」のほうで済みじるしをつけていたためだとしたことをも、くつがえしてゆくことになるからである。したがって少々煩わしい調べではあるが、行きがかり上たしかめておかなければならない。

そこでいま「索引」の「第二案」のなかの任意の箇所、たとえばノートM二九ページでつぎのように記している箇所を取り上げて見てみよう(『ブルントリッセ』ではS.861八～二行。「」内は『ブルントリッセ』編集者が記したものを)。Geld als Maß und als Zirkulationsmittel verschieden. (Garnier, Storch I, 36 [S. 105³⁴—106¹², S. 107⁴⁻¹³]) (I, 37 [S. 107²⁷⁻³⁸]). (Gouge. Maß in den amerik[anischen] Kolonien]. VII, 27 [S. 668⁴⁵—669¹⁴]). Schottland (VII, 38 [S. 700²⁷⁻⁴⁴]). (VII 55. Wilson [S. 746²⁵⁻²⁸]). (Geld bei den alten Deutschen. Wirth.))こは「尺度としての貨幣」についての部分であり、見られるように「尺度としての貨幣と流通手段としての貨幣とは異なる」として、ノート第一冊と第七冊とがともに指示されている箇所——「第二案」で両冊がともに指示されている最初の箇所——であるので、両ノートの使い方を見るうえで具合がよい。そして『ブルントリッセ』編集者はこの Geld als Maß から Wirth.) までが、つまり全文が「一本の波形の線で消されている」という脚注をひけている(手書き原稿のコピーを見てもそうなっている)。

イ まず (Garnier, Storch I, 36) と記してある Garnier (ガルニエ) について見てみよう。

ノート第一冊三六ページでは、『ブルントリッセ』編集者が書き入れているように、『ブルントリッセ』S.105の三四行目からS.106の一二行目にかけてガルニエの書き書きが掲げられている。Grundrisse にひびく「G」の原稿」としては Urtext があるが、この「尺度としての貨幣」の部分はごんにち失われているとされている。

で、『済経学批判』と対照してみよう。

『済経学批判』には *Werke* 版びんごう S. 57~58 のように、この「索引」で記している問題を扱っているが、その最初の書や出だしは、このように書かれている。Die Verwandlung der Ware in Rechengeld im Kopfe, auf dem Papier, in der Sprache, geht jedesmal vor sich, sobald irgend eine Art des Reichthums unter dem Gesichtspunkt des Tauschwerths fixiert wird. (頭の中の、紙の上の、言葉の上の、商品の計算貨幣への転化は、なにかの種類の富が交換価値の観点のもとで見えなればすべし、いづれも生じる)。そしてマルクスは、このようにガルニエに、このように注記を付けて、G. Garnier, einer der ältern französischen Übersetzer Adam Smiths, hatte den sonderbaren Einfall, eine Proportion festzusetzen zwischen dem Gebrauch von Rechengeld und dem Gebrauch von wirklichem Geld. Die Proportion ist 10 zu 1. (Garnier, G.: „Histoire de la Monnaie, depuis les temps de la plus haute antiquité etc.“, t. 1. p. 78.) 「なほ *Werke* 版びんごうの注の最後の閉じ括弧が欠落している」。(アダム・スミスの初期のフランス語訳者の一人である G・ガルニエは、計算貨幣の使用と現実の貨幣の使用とのあいだの比率を確定しようという奇妙なことを思いついた。この比率は 10 対 1 だとしている。(G・ガルニエ『貨幣の歴史。最古代の時期から云々』、第一巻、七八ページ))。

『批判』でこのように書かれているのは、このように Grundrisse のほうでは第一に、ガルニエの書からの抜き書きで、『マルントリッチャ』S. 105 四五行目~S. 106 五行目のように、このように、このように文が見られる。——Das Rechengeld ist ein ideales Maß, das keine Grenzen hat als Vorstellung. Angewandt jede Art des Reichthums auszudrücken, wenn sie nur betrachtet wird unter dem Gesichtspunkt ihres Tauschwert; (計算貨幣は観念的な尺度であり、表象以

外にはなんの限界もたない。どんな種類の富でも、交換価値の観点のもとで見られさえするならば、これを表現するために計算貨幣が用いられる。(これを『批判』のさきの書き出しの文と対照してみると、さきの書き出しの文とここでガルニエの書から抜き書きしていることは、表現の仕方は若干ちがうが内容は同じであるといえよう。そして第二に、マルクスは『批判』のこの書き出しの文のところに前記のようにガルニエについての注をつけているのであるが、Grundrisseのほうではガルニエの書からの抜き書きの末尾のところに(『プルントリッセ』S.106九〜一二行目)、つぎのような文が見られ、またそこにマルクスはつぎのような書き加えをしているのである。—— während, verglichen mit dieser Masse, die Totalsumme des effektiven Geldes höchstens ist = 1 : 10. “ Garnier. (Das letzte Verhältnis schlecht. 1 : vielen Millionen richtiger. Doch dies ganz unmeßbar.) (他方、この数量〔消費物資の数量〕と比較して、実在する貨幣の総額はせいぜい一対一〇である。)ガルニエ。(最後の割合は誤り。一対何百万、何千万といったほうがより正しい。とはいえこれはまったく測定できない)。

(5) なお、Grundrisse (5)については、右のように「ガルニエ」とあるだけでその書名やページが記されていない。Grundrisseではいくつかの箇所でガルニエの *Histoire de la Monnaie* 第一巻が抜き書きされているが、いずれも Garnier と記してあるだけである。だが最初に出てくるノート第二冊三二ページのところに (siehe Heft III, p. 28) と記してある (『プルントリッセ』S. 98, なおこの p. 28 は新 MEGA ではマルクスの書を誤りだと p. 22 と訂正してある。—— Text, Teil 1, S. 114, Apparat, Teil 1, S. 100)。この「ノート第三冊を見よ」としてある「ノート第三冊」は、「一八五〇年一〇月—十一月」にじくられたマルクスの抜き書き帳を指しているのであるが (『プルントリッセ』S. 1061 参照)、『経済学批判』で前掲のように書名、ページを入れているのは、この抜き書き帳によったのであろう。

□ *ガルニエ、マルクス* (Garnier, Storch I, 36) と記してある Storch (シュトルヒ) について見よ。

シュトルヒについては、ノート第一冊三六ページでは、『グルントリッセ』編集者が書き入れられているように、『グルントリッセ』S.107の四行目から一三行目に見られるシュトルヒの書からの抜き書きが掲げられている。この抜き書きのうち、その一一行目～一四行目のところにつきのような文がある(ただし『グルントリッセ』と新MEGAとでは手稿の解読がすこしちがうので、こゝでは新MEGA第二部第一巻 Text, Teil 1, S. 122²⁴⁻²⁶にしたがって掲げておく)。——Im Handel zwischen Rußland und China dient das Silber alle Waaren zu evaluiren; dennoch macht sich dieser commerce durch trocs. (ロシアと中国とのあいだの取引では、銀があらゆる商品を評価するのに役立つ。だがしかしこの取引は物々交換によってなされている)。

他方、『経済学批判』のさきに記した *Werke* 版 S. 57～58 のところでは、つぎのように述べている箇所がある。So dient Silber als Maß der Preise in dem Warenaustausch zwischen Sibirien und China, obgleich der Handel in der Tat bloßer Tauschhandel ist. (そしてまたシベリアと中国とのあいだの商品交換では、取引は實際上たんなる物々交換であるのに、銀が価格の尺度として役立つ)。『批判』のこゝではシュトルヒの名は挙げていないが、「索引」で記しているシュトルヒの書からの右の抜き書きが用いられたことは明らかであるといえる。

「索引」で (Garnier, Storch I, 36) と記して指示しているノート第一冊三六ページは、ガルニエからの抜き書きもシュトルヒからの抜き書きもこのように『経済学批判』のなかで使用されているのであるが、しかしノート本文のほうではこれらの箇所には済みじろしがつけられていない。

ハ さくびひんごんさくの「索引」で (Gouge. Maß in den amerik[anischen] Kolon[ien]. VII, 27). と記しているノート第七冊のほうについて見てみよう。

『資本論』準備原稿についての覚え書き(二)

Gouge (ゴージ)の書についてノート第七冊二七ページで記している箇所は、『ブルントリッセ』S. 668の四〇行目からS. 669の一五行目までであるが、そのうちS. 668四四行～S. 669一五行のところを「アメリカ植民地における尺度」にかんしてゴージが述べていることを見ている(なお、前掲のように『ブルントリッセ』編集者は「索引」のついに[S. 668₄₅—669₁]と書き入れており、また「索引」の「第一案」にも(Gouge VII, 27)と記している箇所があるが、同編集者はついに[S. 668₄₅～669₂]と書き入れている)。そのS. 669一一～一五行でマルクスはつぎのような文を抜き書きし、また書き入れを「*Das money in account war überall nominell dasselbe wie in England. Das coin des Landes war besonders spanisch und portugiesisch*“ etc.…… (p. 6. Durch Akt der Queen Anne Versuch gemacht dieser Konfusion ein Ende zu machen.) (『……計算上の貨幣はどこでもイギリスと各目上は同じものであった。この地の貨幣はとくにスペインとポルトガルのものであった』云々。……(六ページ。アン女王の法令によって、この混乱を終わらせようとする試みがなされた))」。

他方、『経済学批判』の前記の *Werke* 版 S. 57～58 のところでマルクスは、「計算貨幣としての貨幣は一般にただ觀念上存在しているだけであまわないのであって、現実に存在している貨幣がまったく別の度量標準にしたがって鑄造されている場合がある」と述べ、ついでつぎのまよりに記している。——So bestand in vielen englischen Kolonien in Nordamerika das zirkulierende Geld bis tief ins 18. Jahrhundert aus spanischen und portugiesischen Münzen, während das Rechengeld überall dasselbe war wie in England. (たとえば、北アメリカでのイギリスの多くの植民地においては、流通している貨幣は、一八世紀になってもずっとスペインとポルトガルの鑄貨から成り立っていたが、計算貨幣はどこでもイギリスと同じものであった)。

マルクスはまた『批判』の右の文の末尾につきのよな注を付している。——Das Akt von Maryland von 1723, wodurch Tabak zur legalen Münze gemacht, sein Wert aber auf englisches Goldgeld reduziert wurde, nämlich ein Penny per Pfund Tabak,……(メアリランドの1711三年の法令は、煙草を法定の鑄貨としていたが、この煙草の価値はイギリスの金貨幣に還元されていた。すなわち煙草一封度が一ペニーであった。……)。他方、Grundrisseの巻の「コージの書から抜き書きを記しているなかにつきのよな文が見出される。——noch 1723 in Maryland ein Akt passed making tobacco a legal tender at one penny a pound, and Indian corn at 20 d. a bushel. (1711三年にまだメアリランドでは、煙草を一封度につき一ペニーとして、また玉蜀黍を一ブッシェルにつき二〇ペンスとして、法貨とする法令が制定された)。

「コージの書」は *A Short History of Paper Money and Banking in the United States*, Philadelphia 1833 にあつて、そのことは右の Grundrisse の箇所を記されている。またマルクスはその Hef VIII のページを記しているのであるが、この「ノート第八冊」は一八五一年四、五月につくられた抜き書き帳であつて、ここでマルクスは「William Gouge の書の抜き書きを記していたわけである。だが『経済学批判』ではコージの名はどこにも出づらくなく、右の箇所でもコージの名は挙げられていない。しかし Grundrisse でコージの書から記していることが、『批判』のなかで右のような形で用いられているのである。

(6) 上記の箇所の原文。——Das Geld als Rechengeld mag überhaupt nur ideal existieren, während das wirklich existierende Geld nach ganz anderem Maßstab gemünzt ist. 大月書店刊『全集』第一三巻の『経済学批判』の訳で、
が、「計算貨幣としての貨幣は一般にただ観念的に存在しているだけでかまわないが、他方、現実存在している貨幣はま

たく別の度量標準にしたがって鑄造されているのである」と訳されている(一九七〇年四月の第六刷)。mag……, während ……の関係を見誤ったのであろうか、これでは意味のうえて少々具合が悪いのであって、誤訳とされるべきであらう。

二 ひょに、やまの「索引」に Schottland (VII, 38). と記してあるところを見よ。

ノート第七冊三八ページで「スコットランド」について記している箇所は『バルントリッヤ』S. 700 の三八行目から四四行目の箇所であって、*Economist* 誌からの抜き書きが記されている(『バルントリッヤ』巻末の「Anmerkungen」による)。これは一八四四年一〇月五日付の同誌第一巻五八号からのもの由。また同じく巻末の *Literaturverzeichnis* にある、これは一八五二年一二月ごろにつくった抜き書き帳ノート第六冊から書き取ったものとみられる。——S. 1072, 1064。

『経済学批判』のやまの *Werke* 版 S. 57~58 の箇所と対照してみると、『批判』では、諸商品は何ギンド何ギリンと表現するためには現実の金の一片も用いられないうし、ギンとびのようになすべから。——So zirkulierte in Schottland vor dem Bankakt Sir Robert Peels von 1845 keine Unze Gold, obgleich die Unze Gold, und zwar ausgedrückt als englischer Rechenmaßstab in 3 Pfd. St. 17 sh. 10 1/2 d. zum gesetzlichen Maß der Preise diente. (たぶん、スコットランドでは、一八四五年のサー・ロバート・ピールの銀行法以前には、一オンスの金が、しかもイギリスの計算度量標準として三ポンド一十七シリンズ一〇ペンニ分の一で表現されて、法定の価格の尺度に役立っていたけれども、一オンスの金を流通してこなかった)。

つれごとく Grundrisse の右の抜き書き文。——, In Schottland the medium of exchange, nicht zu verwechseln mit dem standard of value, von dem amount of 1l. und upwards may be said to be excusively paper, und gold does not circulate at all; yet gold is as much the standard of value as if nothing else

circulated, because the paper is convertible into the same fixed quantity of that metal; and it circulates only on the faith of being so convertible". (訳は省く)。

本 最後にならば「ソート」で (VII, 55. Wilson). と記している箇所を見よう。ここはすこし面倒であるが、辛棒されたい。

『グルトトリッセ』編集者はここに既掲のように「S. 746²⁵⁻²⁹」という書き入れをしているとともに、「Wilson はおそろく Morrison の書き誤りである (Wilson möglicherweise verschrieben für Morrison)」。S. 858. および 862. を参照せよ」という脚注を入れている。

ノート第七冊の五五ページには Wilson の名を挙げて記している文章は見当たらない。そいつ、この (VII, 55. Wilson). と記している「索引」の箇所は、既掲のように「尺度としての貨幣と流通手段としての貨幣とは異なる」という書き出しで記している一節であるから、ノート第七冊五五ページのなかでこの問題になんらかの関係のある内容をもつ文はどの箇所であるかと見てみると、一つは『グルトトリッセ』でいうと S. 746 四四〜四五行で *Economist* 誌を挙げている箇所であり、いま一つは——『グルトトリッセ』編集者が書き入れているように——同じページの二五〜二九行で Morrison の書を挙げている箇所ということが出来る。『グルトトリッセ』編集者は「索引」で指示しようとしたのはこの後者であると考え、そして Morrison と書くところをマルクスが Wilson と書き誤ったのだらうとしたわけである。しかし Wilson——James Wilson (1805〜1860)——は『エコノミスト』誌を創刊し、編集に当たった人であって、同誌に多くの論説を書いており、『エコノミスト』誌とはきわめて関係の深い人である。マルクス自身も『経済学批判』のなかで「マックスの *History of Prices* と「マイルソンの *Capital, Currency*

所を挙げて「参照せよ」としているのは、たんに、そこでもマルクスはノート第七冊五五ページのモリソンの箇所を指示しているところを記しておこうとしたのか、あるいは、そのことがこの Wilson を Morrison の書き誤りと見るとえでなんらかの傍証となると考えて記したのか、いずれかわからない。しかし、S.862 三行目と (VII, 55. Morrison). と書いてゐるのはノート M 三〇ページのはじめのほうの箇所であり、いま見ている S.861 一一～一二行と (VII, 55. Wilson). と書いてゐるのは二九ページのおわりのほうの箇所なのであって、マルクスがノートに書いてゐる行のほうと、前者は後者の七行あとにすぎない。このことはむしろ、Wilson が Morrison の書き誤りでないことの一つの傍証たりうるものではないか、とも考えられるであらう。

a さて、この Wilson は Morrison の書き誤りであろうとする『ブルントリッセ』編集者の見解にしたがって、ノート第七冊五五ページの『ブルントリッセ』S.746 二五～二九行のところでもマルクスがモリソンの名を挙げて記している事柄と、『経済学批判』での記述との関連を見てみることにしよう。

ノート第七冊のこので、マルクスは引用符をつけないでつぎのように記してゐる。——Das englische & St. etwas weniger als $\frac{1}{3}$ seines ursprünglichen Werts, der deutsche Florin = $\frac{1}{6}$, Schottland vor der Union [reduzierte] sein Pfund zu $\frac{1}{8}$, der französische livre = $\frac{1}{7}$, der spanische moravedi = weniger als $\frac{1}{1000}$, das portugiesische re noch tiefer. (p. 13, Morrison.) (イギリスのポンド・スターリングはその元来の価値の三分の一よりくらかすくないし、ドイツのフロリンは六分の一に等しく、連合前のスコットランドはそのポンドを三十六分の一に「減少させた」し、フランスのリーヴルは四分の一に等しく、スペインのマラヴェディは二〇〇〇分の一以下であり、ポルトガルのレイはもっと小さい。(一三ページ、モリソン)。(「」内は『ブルントリッセ』編集者が書き入れたもの)。

これとはほぼ同じことが、『批判』のなかの *Werke* 版 S.55 のところで書かれている。——「……歴史的過程は、価格の度量標準としての機能における貴金属の重量がたえず変動し減少していったのにたいして、同じ重量名がそのまま用いられた、ということをもたらした。こうして、イギリスのポンドはその元来の重量の三分の一以下を表わし、連合前のスコットランドのポンドはもっとすくなく三分の一を、フランスのリーヴルは四分之二を、スペインのマラヴェディは二〇〇分の二以下を、ポルトガルのレイはさらにこれよりずっと小さな割合を表わしている (So bezeichnet das englische Pfund weniger als ein Drittel seines ursprünglichen Gewichts, ……der portugiesische Rei eine noch viel kleinere Proportion)。⁽²⁾」

だが、『批判』のこの部分は、「索引」の「第二案」の S.862 三行目で前記のように *Deprezation des Standard (スタンダードの減価)* (VII, 55. Morrison). と記している箇所と関連しているのであって、「索引」のいま問題としてる S.861 の (VII, 55. Wilson). ー) の Wilson が Morrison の書を誤りだとしていま見ているわけである——の箇所と関連しているのではないであろう。いいかえれば、『批判』で右のようにノート第七冊五五ページのモリソンの記述を使用したさい、「索引」で済みじるしをつけたのは、S.862 三行目で「スタンダードの減価」と記して五五ページを指示している箇所であって(この箇所もやや斜に横に引いた線を消されてる) S.861 の (VII, 55. Wilson). と記している箇所ではない、と考えられる。というのは、『批判』の右でモリソンの記述を使っているのは、同じくポンドならポンドという価格の度量標準の名称がだんたんによりすくない金属重量を表わすようになった、ということの説例として使われているのだからである。そして、これにたいし、いま問題としている「索引」の (VII, 55. Wilson). の箇所は、既掲のほうに「尺度としての貨幣と流通手段としての貨幣とは異なる」という書き出しで

記している一節であるから、こうした事柄との関連で使われているのでなければ具合が悪いからである。

『批判』のうち右の「索引」箇所が使われていたのは、これまで見たところでは *Werke* 版でいうと S.57~58 の部分においてであった。そこで、モリソンのさきの記述がこの部分でどのように使われていると見ることができるといふ検討をしてみよう。『批判』のこの部分のなかでマルクスがつぎのように述べている箇所がある。すなわち、「それゆえまた、計算貨幣としての貨幣にとつては〔*Werke* 版では Für das Gold als Rechengeld となつてゐるが〕*Gold* は *Gold* の誤りであろう」⁸。その度量単位そのものなりその細分なりが現実に鑄造されているかいないかは、どうでもよいことなのである」として、その説例として、ウイリアム征服王の時代のイギリスでは純銀一封度⁸であつたポンドと、一封度の二〇分の一であつたシリリングとが計算貨幣として機能していたが、実際に鑄造されていた最大の銀貨は銀一封度の二四〇分の一のペニー貨であつたと記し、ついで同じく説例のつづきとして、「逆にこんにちのイギリスでは、シリリングとペンスとは、一オンスの金の一定の部分にたいする法定の計算名であるが〔わが国で純金七五〇ミリグラム＝一円としていたのと同じ意味で、イギリスでは標準品位の金一オンス＝三ポンド一七シリリング一〇ペンス二分の一と記してゐたことを指してゐるもの〕、何シリリング〔金〕貨や何ペンス〔金〕貨はぜんぜん存在してゐない (Umgekehrt existieren im heutigen England keine Shillinge und Pence, obgleich sie gesetzliche Rechenamen für bestimmte Teile einer Unze Goldes sind)」と記している箇所がある (〔内〕三宅)。

貨幣名が本来表わしている金属重量と、実際に表わしている金属重量とが大きくかけ離れてしまつてゐる、——これがモリソンの書から記してゐた事柄である。そしてイギリスではその後、銀から金へスタンダードが変わつたことも加わつて、一ポンドといつてもそれが表わす金量は、一封度の一二分の一である一オンス、これの四分の一ぐらゐ

の重量(約四七分の一封度)となっていた。したがって、一ポンドのソヴリン金貨は、前稿四の末尾の注(18)で記しておいたように標準重量は一二三・二七四グレインであつて(なおトロイ・オンスⅡ四八〇グレイン)、これはグラムでいうと、一グリーンⅡ〇・〇六四八グラムであるから、約八グラムである。そしてシリング金貨やペンス金貨は製造されていないのであるが、一シリングは一ポンドの二〇分の一、一ペニーは一シリングの一二分の一であるから、一ポンド金貨が約八グラムであるさいには、何シリング金貨、何ペンス金貨というのは製造しても、いずれも本位鑄貨としては小さすぎて通用しえない、だから「何シリング」「金」貨や何ペンス「金」貨はぜんぜん存在していないのだ(一〇シリング金貨ぐらいならば約四グラムであるから、通用しえないことはない大きさではあるが)。

さきの、計算貨幣とその度量単位やその細分の鑄造との関係について述べ、説例の一つとしてシリング金貨やペンス金貨が鑄造されていないことを挙げて『批判』の記述を書くに当たつて、ノート第七冊五五ページのモリソンからの文がかりに使われたとすると、マルクスは右のような関連においてこれを使ったのではなからうか、と考えられる。両文章のあいだに関連性を求めるとすると、右のような関連が考えられる。だが、しかし、「索引」の(VII, 55. Wilson). — ノート第七冊五五ページのモリソンからの文 — 『批判』の右の記述、この三者のつながりを見る場合、すくなくとも『批判』の右の記述では、「索引」のここがモリソンの箇所を指していると解することはかなり強引な解釈だとせざるをえない。また『批判』のこの *Werke* 版 S. 57~58 の部分では、ほかにモリソンの文と結びつけうる箇所がない。こう見てくると、けっきょく、マルクスが「索引」で (VII, 55. Wilson). と記しているのを、ノート第七冊五五ページのモリソンの箇所を指示していると見ることは、どうも無理だということになつてくる。なつてござるをえない。

b そこでつぎに、ノート第七冊五五ページのなかの、『グルントリッセ』S.746 四四～四五行の『エコノミスト』を挙げてゐる箇所を見てみよう。

ここでマルクスはつぎのように記している。——「一オンスの金も流通しなくても、スタンダードが金であることがあつた。 (Hilfenot.) (Der standard kann für Gold sein, ohne daß eine Unze Gold zirkuliert. (Economist.))」

これは、さきの二で見たノート第七冊三八ページ(『グルントリッセ』S.700 三八～四四行)でスコットランドについて『エコノミスト』から抜き書きしていた事柄——スコットランドでは金はまったく流通していないが金が価値のスタンダードとして機能しているということ——と基本的に同じものであつて、その要点だけを簡単に記したものと⁽⁹⁾てよい。したがつて『批判』でここを使ったとすれば、やはり二で見たと同じ『批判』の箇所でここを使ったのであろう、ということになる。そしてそう解するには、「索引」で(VII, 55. Wilson). と記しているそのウィルソンがこの『エコノミスト』を指していると解すればよいのであるが、前述したようなウィルソンと『エコノミスト』との関係からいつて——この文が『エコノミスト』にウィルソンの名で書いている文、ないしその要約であればいさう十分であるが、かりにそうはつきりしたものでないとしても——、マルクスが自分の心覚えとして記した「索引」で Economist と記すかわりに Wilson と記したと見ることは、さほど不自然なことではないと考えられる。ただし、「索引」としてはさきの Schottland (VII, 38). だけで足りるのに、なぜ重ねて (VII, 55. Wilson). と記したのか、という点が疑問として残るが、しかしこの点は、ノートのなかで同じ内容のことを二箇所で書いていたので、二箇所とも挙げておいたのだと簡単に解すればよいであらう(じつのところ筆者は最初は、この『グルントリッセ』

S.746四四～四五行で『エコノミスト』を挙げて記している内容がさきの二で見た『エコノミスト』からの抜き書きの内容を手短かに単純化して記したものにすぎない、というところから、『グレントリッセ』編集者が言うようにマルクスが Morrison を Wilson と書き誤ったと見るほうが妥当であろうと考えたのであるが、しかしモリソンの箇所だとして見てゆくと前記のように関連性のないであろう無理の感があるので、そこであらためて『エコノミスト』とウィルソンとの結びつきという線を検討してみた、というのが事の経過なのであった。

この本のところは Wilson のままか Morrison の書き誤りかという、本題とはやや離れた別件が加わったため、論がすっかり長くなってしまったが、要するに、「索引」の(VII, 55. Wilson)は、『批判』ではさきの二で見た Schottland (VII, 38). のやいと同じ箇所で、したがってまた二で見た使い方が使われている、というのが結論である。

(7) マルクスは、ノート第七冊五五ページでモリソンの名を挙げて引用符をつけないで記している前掲の文のなかで「イギリスのポンド・スターリングはその元来の価値の三分の一よりいくらかすくない」と記しているその「元来の価値の」という語を、『批判』のここでは「元来の重量の」と書き変えている。

イギリスでは最初——ワイリアム征服王のとき——一ポンドというのは標準銀(純分一〇〇分の九二五)の重量一封度に付けた貨幣名であったが、一封度の標準銀から最初二四〇個のペニー貨を鑄造していたのを、一三〇〇年からその個数をふやすことが行なわれ、また一五四三年から銀の品位を下げる事が行なわれた。こうした鑄貨改悪にたいしてエリザベス女王時代(一五五八年～一六〇三年)の改鑄で銀の品位を元に戻し、また重量一封度の銀から鑄造するペニー貨の個数を減じ、けっきょく一六〇〇年に標準銀の重量一封度から鑄造するペニー貨の個数を七四四個とした。重量一封度の標準銀地金 \parallel 七四四ペンス \parallel 六二シリング \parallel 三ポンドニシリング。モリソンが「イギリスのポンド・スターリングはその元来の価値の三分の一よりいくらかすくない」と言っていたのは、最初重量一封度の標準銀が一ポンドであったのが、右のように三ポンドニシリングとなったことを指していたはずであるから、また「価値」はそれ自身では測定しえないものであるから、ここは「重量」とされ

なくてはならない。マルクスは『批判』でこのモリソンの記していることを資料として使うさい、この点の言葉の使い方を正確にして使っているわけである(なお、三宅『貨幣信用論研究』中の「金屬鑄貨論」一二九ページの注(4)参照)。

だがしかし、マルクスがここで上掲のように So bezeichnet das englische Pfund weniger als ……と現在形で書いているのは具合が悪く。モリソンの書は *Observations on the System of Metallic Currency, adopted in this country*, London 1837 であるとされている(『グレントリッセ』S. 1050, Anmerkungen)。モリソンのこの文がどういう前後の關係のなかで書かれていたのか分からないが、この書の刊行年の一八三七年当時ですでに、イギリスのポンドの金屬重量は元來のその「三分の一」以下というものではなかった。というのは、その後イギリスでは一八世紀のはじめにスタンダードが銀から金に変わり、一八一六年の「ゴールド・スタンダード・アクト」でこれが法制的に確立されたのであるが、そこでは標準金一オンズ、三ポンド一七シリング一〇ペンス二分の一であったからである。つまり、トロイ衡で一封度の一二分の一である一オンスの金に対して、三ポンド一七シリング云々と呼ぶことになっていた。マルクスは Grundrisse から引き写すことに氣をとられていたのであろうか、若干書き加えねばならない言葉を書き加えずに、しかも現在形で書くというミスをしているのである。

(8) マルクスはここで「純銀一封度 (1 Pfund reines Silber)」と書いているが、普通には右の注(7)で記しておいたように、ウイリアム征服王の時代に前記のような銀の品位を定めたとされている(三宅『貨幣信用論研究』中の「金屬鑄貨論」一二六～七ページの注(1)参照)。

(9) したがって、S. 700 三八～四四行の箇所が前記のように一八四四年一〇月五日付の『エコノミスト』から採ったものであるとすれば、この S. 745 四四～四五行の箇所も『エコノミスト』の同じところから採ったものではないかと思われる。しかし『グレントリッセ』巻末の Anmerkungen ではこの S. 745 四四～四五行の箇所にたいして、「マルクスの抜き書き文から判断して、『エコノミスト』の一八四七年一〇月一六日付または二三日付のいずれかの号に關係あるものである」と記している(S. 1050)。ノート第七冊三八ページで『エコノミスト』のある号から採って記したことを——『エコノミスト』から直接にはなく前につくった抜き書き帳からであるが——、こんどはごく要約した形で五五ページでふたたび記していると見るのは適當でない、と『グレントリッセ』編集者は考えたのかもしれない。だが、一八四七年一〇月の「一六日付または二三日付のいずれかの号」というように場所がはっきりしていないとすれば、これも同じ「一八四四年一〇月五日」の号と見たほうがむ

しろ自然ではないかと思受けられるのであるが――。

なお、このS.5の四四〇四五行の箇所があるノート第七冊五五ページ(前記モリソンの記述もこのページのなかにある)の手書き原稿のコピーを見ると、ところどころに済みじるらしい線がかすれて見えるとともに、上から下まで全体が一本はつきりした線でほぼ垂直に消されているのであるが、そのなかでこのS.7の四四〇四五行の箇所――原稿では一行の半分ぐらいの長さにすぎない――は、どういふわけか文の頭に×印がつけられている。

さて以上、「索引」の「第二案」のなかの『グルントリッセ』S.861八〇一二行の箇所を取り上げ、ここで指示されているノート第一冊、第七冊の本文と『経済学批判』のなかでの記述とを、イ、ロ、ハ、ニ、ホと五箇所について対照してみた。そして以上見てきたところによれば、ノート本文を『批判』のなかで使っている使い方は、ノート第一冊の場合と第七冊の場合とのあいだでいずれも差異があるとは見受けられないのである。

このようにノート本文の使い方に差異がないのであるが、他方、そのノート本文のところでもノート第一冊の場合にはErläuterungsvermerkがつけられていないのたいし、ノート第七冊のほうではどうであろうか。この点はすでに2で見たことであるが、この3で見たノート第七冊の箇所についてここでさらに付言しておく、つぎのようにErläuterungsvermerkがつけられているのである。

この3で見たノート第七冊の二七ページ、三八ページ、五五ページの箇所は、手書き原稿のコピーで見ると、二七ページのゴージの書について記している箇所は、文字の上ではなくその箇所の右端にその部分にたいして縦の線が引いてある。また、三八ページのスコットランドについて『エコノミスト』から抜き書きしている箇所は、とくにこの箇所にたいしてしるしづけはされていないが、三八ページの上から下まで一本の垂直の線で消されている。また、五五ページの『エコノミスト』からの箇所は、さきに注(9)で記しておいたように×印がつけられているが、同ページ

のモリソンからの箇所は、とくにこの箇所をたいするしるしづけはされていない。そしてこの五五ページ全体にわたって——このページはその最後の数行にさきに2で見たアーカートからの抜き書きが記されているページである——一本のほぼ垂直の線が引かれている。

この3は予想以上にだいたい長いものとなったので、なんのためにこういうことを考察してきたかという筋道が見失われてしまったかもしれない。そこで、「貨幣の章」に *Erläuterungsvermerk* がないことにかんしての新MEGA編集者の説明に納得がゆかないとして本項で論じてきたことの筋道をいま一度簡単に記しておく、筋はこういうことであつた。はじめに、「貨幣の章」のところに *Erläuterungsvermerk* が「まったく見出されない」のは、マルクスが「のちの原稿」にこれを利用したさい、ノート本文に済みしるしをつけず「索引」の当該箇所に線を引いて消しておく方法を採用していたためではなからうか、とまず考えられるとし、だがここから新MEGA編集者の判断を正当はずれなものとの結論をするまえに、たしかめておくことが必要なくつかの点について見ておこうとして、1として、「貨幣の章」では済みしるしがないのに反して「資本の章」ではなぜ済みしるしがついているかという点について、2として、ノート第七冊でも「貨幣の章」に属する事柄が扱われており「索引」のなかでも第七冊の箇所が数多く挙示されているが、このノート第七冊のほうでは「索引」で済みしるしがついているさいノート本文のほうに済みしるしがついているかどうかという点について、見た。そして「資本の章」ではノート本文のところに済みしるしがついているが、「貨幣の章」での「索引」に該当する *Referate* ないし「*Planentwurf*」のほうには済みしるしがついていないこと、つまり「資本の章」ではこれを「のちの原稿」で利用したさい、索引のほうに済みしるしをつけずノート本文自体に済みしるしをつける方法を採用したとみられること、またノート第七冊の場合には、ノート第一冊

と第二冊はじめの場合とちがって、「索引」で済みじるしがついている箇所の該当のノート本文のところでも済みじるしがついていないか、かならずしもとくにその箇所についてという形ではないが——ついていること、こうしたことを見た。そして最後に3として、「索引」で同じく済みじるしをつけていても、ノート第一冊と第二冊ははじめをさせたさいとノート第七冊を使ったさいとは使い方がちがったかどうか、もしノート本文の使い方には差異があったためノート第一冊と第二冊はじめのほうでは済みじるしがなく、ノート第七冊のほうでは済みじるしがついているのだとすると、はじめに述べた、ノート第一冊と第二冊はじめに済みじるしがないのは「索引」のほうで済みじるしをつけていたためと推測されることもくつがえされることになるとして、この点についてさらにたしかめてみようとしたのだ。そしていまこの3の考察を終えたというわけである。

こうした以上の考察からいって、はじめにまずこう考えられると記しておいたことを、もはやたしかにそう考えてよいとしてよいであろう。すなわち、「貨幣の章」のところに *Erdigungsvermerk* がないのは、マルクスが「貨幣」についての「索引」で済みじるしをつけるという方法を採用していたためと見られる、ということである。したがってまた、新MEGA編集者が *Apparat, Teil 1, S. 30~1* で述べていることは、まったく見当はずれの判断だった、という結論ならざるをえないことになる。

はじめに新MEGAでの右の説明を見たい、これはおかしい、マルクスが「索引」に済みじるしをつけていることを考慮していいのではないか、また総じて「索引」の存在を考慮に入れていいのではないか、という疑いが生じたが、新MEGAでの説明が見当はずれのものだと断定するためにはなおいくつかの点についてたしかめてみるこ

とが必要であるので、その考察操作を試みたところ、すっかり長くかかってしまった。途中で、新MEGA編集者がつまらないことを書いていたのでその論を検討するため長々とこんなことをするのは、まことにバカバカしいとも思ったが、しかし、「七冊のノートへの索引」をマルクスがどのように使っていたかは前々から一度たしかめてみたいと考えていたことでもあったので、この機会にと進めてみたのだった。そして本項での考察で、ごく一部分についてはあるが「索引」の使われ方の様子がわかったのは、副産物としての収穫であった。マルクスは一八五八年一月二九日付エンゲルスへの手紙で——この手紙は本項のはじめに掲げた新MEGA編集者の文中でマルクスが「粗稿」と呼んでいるとして引いている手紙であるが——、原稿の印刷用仕上げが遅れた原因について述べているなかでつぎのように書いている。「最後に、第一の部分 (die erste Abteilung) がより大きくなったこと。というのは、最初の二つの章 (die beiden ersten Kapitel) そのうち第一章商品は粗稿ではぜんぜん書いていなかったし、第二章貨幣または単純な流通はごく短いあら筋でしか (nur in ganz kurzen Umrissen) 書いていなかったが、この二つの章を、最初に意図していたよりもずっとくわしく書き上げるようになった (weiläufiger ausgeführt worden sind) からだ」と。このようにマルクスは Grundrisse では「第二章」は「ごく短いあら筋でしか」書いていなかったが、印刷用原稿ではずっとくわしく書くことになったと述べている。じっさい、『経済学批判』の「第二章」では Grundrisse の記述をただに整理するというのではなく、大きく書き直し書き加えがなされている。だがそれとともに、前記の3で見たようにやや些細に对照してみると、对照してみた部分がたまたまそうであったのかもしれないが、予想以上に『批判』を書くさいに Grundrisse の記述がよく使用されている。「索引」——ノート本文——『批判』の関連が予想以上に緊密であって、对照してみた『批判』の Werke 版 S.57~8 の箇所はほとんどの部分がこの関連で作成さ

れており、Grundrisse のノート第一冊、第七冊での記述によって埋められている。「索引」の使われ方から、こうした「索引」——ノート本文——『批判』の関連を検出できたのも——この箇所はやや特殊ではあるが——副産物としていま一つの収穫であった。

(この六は、ここで考察しようとした本論は以上で終わるが、なお若干の補論をつけ加えておくこととする。したがってこの六はまだ未完。つづいて新MEGA第二部第一巻第一冊での編集者の記述にたいする疑問をなお二、三記してGrundrisse についての部分を終わりとし、つぎに移ることとする。一九七七年八月)